

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 5年 2月 3日(金)

節分 その2 通算 302号

◇ 氷柱 と 垂氷

「氷柱」と書いて、【つらら】と読む。

季節感があり、意図があって品のよい「熟字」だ。

【つらら】と言えは、軒から垂れ下がるイメージで、「垂氷」と評する感覚がある。「垂氷」はもちろん【つらら】のことだが、これは【たるひ】と読む。



自分が見た中で最も壮観だったのが、右写真の「つらら群」。まさに【氷の柱】だった。こちらは「氷柱」と書いて【ひょうちゅう】と読むのが適切だろう。

ちなみに、「氷柱」の読みは、【つらら】と【ひょうちゅう】のどちらも正解だ。

【つらら】に関わる「心温まる話」をひとつ紹介したい。

昨日(2/2・木)の朝のことである。

全通学団の通過を確認して登校指導を終え、正門をくぐった桜階段の下あたりで、2年生「なかよし3人娘」のS奈さん、H希さん、M恵さんが集まり、何かの相談中だ。彼女らの横をふらっと通り過ぎるとき、自分を見つけたS奈さんが、『先生ほら、これ見て』と手に持った見事な「つらら」を差し出した。

これがなかなか立派な「つらら」で、長さにして25cm、直径5cmほどの代物。『すごい大きいね』と、思わず声が出たのは、「つらら」と彼女の体の大きさとの比較から。小柄なS奈さんが持つから、結構な大きさだ。続いてS奈さんに問うと、予想どおり登校時に見つけたとのこと。常磐は夜半の冷え込みが厳しいのだ。

3人娘たちの会話を聞いていると、彼女たちの相談内容の察しがついた。『最初に私が先生のところに行って、S奈ちゃん来ないかなあと言うから、ちょっと経ったらS奈ちゃん来てね』とM恵さん。『はじめは体の後ろに隠して持っていたほうがいいよ。それから、ぱっと出すほうが、先生びっくりするよ』とH希さんが続く。『わかった』と大きく頷くS奈さん。担任の飯田先生が驚く様子を思い浮かべているのだろう。3人の表情は【ニコニコ】だ。とってもいい場面。

さらに、見つけた大きな「つらら」を、S 奈さんがわざわざ学校まで持ってきた理由が泣かせた。

『担任の飯田先生に見せて驚かせたい』というもの。「学級の友達に」というのが普通だろう。S 奈さんが向けた対象は、「担任の先生」というところが心温まる。

S 奈さんが抱いた思いこそ、飯田先生が1年をかけてクラスの子供たちのために力を尽くしてきた結果・成果なのだ。新卒の殻を破る成果に、合格の太鼓判だ。

児童が円陣をつくって話をしているときに気付いたことがある。

どうやらS 奈さんは手袋をもってきていなかったようで、シャツの袖をぐいと伸ばして余裕をつくり、「つらら」に巻いて保持している。だから、持つ手が「つらら」で冷やされて、遠目に見ても真っ赤っ赤だ。

手は冷えきっているであろう。それでもS 奈さんの顔から「ニコニコ」が消えないのは、心がぼかぼかに温まっている証。

3人娘の「ニコニコ」顔が引き締まる。どうやら作戦は固まったようだ。

なるほど、この日は【2年生の2月2日】。

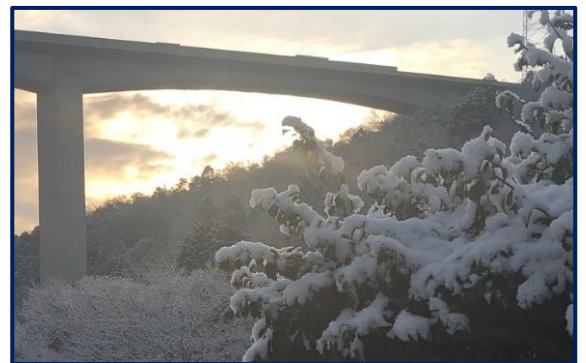
2がたくさん重なる2年生の日か。どおりで3人娘は【ニコニコニコ】。

「ニコニコニコ」顔の3人娘は、桜階段をいつも以上の勢いで登っていった。靴箱で子供たちを迎える担任の飯田先生のもとに。

「2年生の心温まる日」のお話。〈おしまい〉

〈おまけ〉

「垂氷」によく似た熟字で、「垂雪」という語句がある。木の枝などに積もる雪、そこから滑り落ちてくる雪のことを指すのだが、この読みがなかなか趣深い。【しずりゆき】と読む。



【しずり雪】を漢字を通して思い描く。

「音もなく、すすすうっと、ゆっくり静かに落ちる雪」のイメージそのままである。

ねておきぬ 戸をこそくるや しづり雪 <永井荷風>